



フィリピンのミンダナオ島に行ってきました。空から見ると、レイテ島などなじみのある地名ばかり。日本軍の洞窟跡は雄光もこぼっていて、頭蓋骨のイミテーションが飾ってあるし、きらめく近代デパートの軍用品売り場ではやっぱり骸骨に鉄砲がかぶさって展示されていた。マニラのアメリカ軍の墓も見渡す限りの十字架で3万以上あったが、みんな日本人が殺したものだ。色々な結び文が頭ご浮かびます。

ミンダナオのダバオ市は田舎としたら大きな中心都市だが、新聞を読むと面白い。選挙違反の事が載っていて、187人の有権者の村で選挙違反をした人が名乗り出るように呼びかけたところ、カトリックの司祭さんが45人も引き連れて自首してきたら、収容しきれなくて、警察は皆さんにお願ひして帰ってもらい、もう自首してこなむようにきつく言い渡したそうた。たまたま、ダバオ市の市長も、検察長官出身だが、時折、二丁拳銃を下げてハーレーの後ろに若い彼女を乗せて目抜き通りを走りぬき、気が向くと、手放して銃を空に向けて撃つというわさ。選挙管理委員長も銃は20丁隠し持っていると言っているし、その他の首長も、機銃を含め多数所持しているのもわかっているが、警察は色々な文化があることだしといいつつ、逮捕する考えはないと言っているようだ。その上、四人首を切られたそうだが、よく読むと十一人殺されている。まあ、イスラムのゲリラだが、新聞でこの状態、いまいかげんさに人間味あって実にも、国で、勝手にやってなさいねと言いたくなる。

ダバオ市の現地バナ農園の野原に人を集めて、トイレや衛生の話をしてから、広大な農園を巡りながら島を縦断してきました。1600mの山越えは風雨で寒かった、農園から農園へと車を乗り継いで行く。見渡す限り大きな木をすべて切り払った山野は低木の緑こそ美しいが無残だ。ほぼ全部日本へ持って行って、もう大半は灰になっているのかもしれない。植林する金は渡したと言っているが、そんなものみんななくなってしまって、植林などしてないのはあたりまえのように日本側も知っているのだ。

えー、飲んじまえという気になって毎晩友人とバーで飲んでたが、一人の50代とおぼしき渋い声の女性がジャズを歌っていて、その声でマボガニーの輝ききらめくバーカウンターをふるわせていた。「どこから来たの?」「日本から。」「何聴きたい?」「50年代のジャズ。」3人のバンドを従えて野太くしみじみと歌ってくれて、二人ともうなりながらゆらめくらム酒(タンデュワイ12年もの)のオレンジ色を見つめていた。「くそー、いいなー。」と彼女が杯を挙げる。

昼間は小雨の中ジーンズの男や女たちと尼だらけになって農園を回ったり、高校を見て先生たちと話したり。たくさん男や女たちの顔を見てきた。みんな笑顔だったが、何か普通なのかを知るためにはもっと時間も、会話も必要だな。バナ、マンゴー、パイナップル、サトウキビ、ドリアン、パイア、ヤシの実と島は豊穡さにあふれていた。台風でさえ、ここには来ないのだから、まあ、ニンゲンが多少いっただけでいいのかもしれない。

帰ってきてからしばらく、あたふたとすごしていたら小学校の担任の先生から11種類の芋をその特生料理の可否を添えて送ってきてくれた。先生も蓄積を使うようになったのかと最初の頃一文字ずつ楷書できっちり書いていらしたところのことを思い出したが、それよりも、毎日、人ご流されて浮き草のように漂っている自分に、この11種類のイモの無骨な姿の存在感は、それまでの清々しくも重々とした、積み重ねられた時間の重さ、雨や陽光や風、笑いや悲しみ、光と影を示して、理由もなく「何がパイナップルだ、イモでいいのだ。」とつぶやいた。このように生きればいいのかと、イモを手にして、しみじみと思ひます。小学校をなかなか卒業できそうもないなと思いつつ、今月も過ぎてゆきますGNOMES

<http://www.interq.or.jp/japan/gnomes/gnomes1>

TEL/FAX 03 5600 0195 高村 哲 GnomesJpn@aol.com